

たまのよこやま

めざせ!! 火おこしマイスター

ヒトと火のかかわり

火おこし体験のつづや記

「ヨッシャー！」「わァーッ！」
 「キッツー！」「続かねー」
 「おおーっ！」「やったー！」「できたあー」

小学生の子供たちが、目を輝かせながら挑戦している、火おこし体験のひとつコマから聞こえてくる声である。

目を輝かせるのは彼等だけではない。中学生も、高校生も、大学生も、社会人も、年輩の方も、女性も男性も、である。

火をおこす方法には摩擦によるものと火花によるものがある。体験される方々には、摩擦によるものの中でも、舞hiri式ともみぎり式の二つの方法で体験してもらっているが、皆さんはたいてい、簡単な舞hiri式を選ぶ。もちろん初めての方には、こちらをお薦めしてはいるが……。

火おこしを始めて暫くすると、うっすらと煙が出てくる。さらに力を入れて続けていくと、こんどは摩擦で削れて溜まった木のカスから、やや多目の煙のぼってくる。これで火種はできた。

ここまでで、皆、肩で息をするようになっていくが、またここから苦しい思いをする。

この火種を、乾燥させたコナラの雄花などの、燃え易いものに乗せて、はじめはやさしく、細くながあ〜く息を吹きかける。すると、赤い火種が光り輝きながらどんどん広がり、さらに煙がモクモク。

「けむい」、「目が痛い」、「咳込む」。でも、この後に喜びが待っている。

ガマンしてさらにひと吹き、ふた吹き。



けむいけど、もうちょっとで……。



みんな夢中で火おこし体験真っ最中！

ついに炎があがる。

誰しもが感嘆の声をあげ、小さくまたは大きく、あるいは心の中でガッツポーズをとる。

普段はほとんど使わない筋肉をフルに使うから、その動作には結構きついものがある。顔には、「きつい」、「つらい」という表情と満面の笑みが浮かび交錯する。

「昔の人が火を手に入れることって

大変なことだったんですね」

「確かにその通りなんです。

ですから昔は、おこした火はできる限り

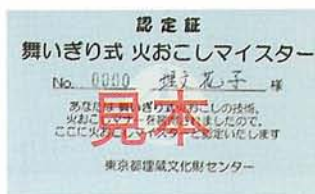
消さないようにしていたんです」

センターでの火おこし体験は、平成11年度からの行事で、今年度でもう10年続いているロングランのイベントである。土器作り教室と同じように、長く続いているのには、それなりの理由がある。

今は誰でも、簡単に手に入れることのできる火だが、昔はマッチもライターもチャッカマンもなかっ



やったあー！ 火がついたあ！



火おこしマイスターの認定証

た時代。火打石が一般庶民に普及するまで、相当な苦勞を伴う動作が必要だった。体力とコツ。それを今の人たちに、体で感じてもらい、火というものの有難味や裸火の扱い方も少～し知ってもらいたい、そんな思いで火おこし体験は始まった。

はじめた頃は年2回程のスケジュールだった。それがいつしか、パックツアーではないのだけれど、小学校の社会科見学とセットで行われるようになってきた。

「社会科見学の時に、

できたら火おこし体験も・・・」

というリクエストが、最近、増えつつある。

「子供たちに体験をさせよう」という授業の傾向と、「センターで火おこし体験をやっている」という評判が見事に融合したものかと思う。その時間の取れない小学校には、出前授業で体験してもらっている。そして今年度からは、担当職員のいる平日なら、いつでも火おこし体験ができるようになり、見事に成功したら「火おこしマイスター認定証」をゲットできる。

ちなみに、平成19年度から今年度までに、センターでは約4,300人が、出前授業では約1,200人が火おこし体験をしている。

また、今年度から実施している、火おこしマイスターに挑戦された人は、延べ137人。そのうち、89人が「舞いぎり式火おこしマイスター認定証」を、18人が「もみぎり式火おこしマイスター認定証」を手に入れている。

ここ数年で、実に5,500人以上の人が火おこしを体験しているのである。

ここでふと、素朴な疑問が、湧き上がる。

いったい、ヒトはいつから火とかかわりを持ち始めたのだろうか、そして、いつ頃から火をおこす、作り出すことをはじめたのだろうか、と。

ヒトが火を使うきっかけとなったその主な現象は、世界的に活発だった火山活動や、自然発火の山火事であろうと考えられている。そして、彼等が使った火はもっぱら、そうした山火事などからの「もらい火」に頼っていたと思われる。

1927年に中国の周口店で発見されたホモ・エレクトス・ペキネンシス（北京原人）は、今から約50万年前に火を使用していたことが明らかにされているし、1975年に南アフリカのスワルトクランズ洞窟においてホモ・エレクトス（原人）が、また1981年にはケニアのチェソワンジャ遺跡において、やはりホモ・エレクトスによる火の使用痕跡がそれぞれ発見され、約150万～140万年前の年代が与えられており、これが現在、最古の事例とされている。

「約150万～140万年前」と「約50万年前」は、それぞれリス氷期（180万～130万年前）とヴェルム氷期（70万～15万年前）の真ッ只中であり、さすがに寒さには耐えられなかったのか。

それから途方もなく長い時間が流れ、いつしかヒトは、自ら火をおこす事を体得した。それがいつのことで、きっかけが何かは、残念ながら分かっていない。おそらくいろいろなものを見て、感じて、必要に駆られ、そして考えて、のことだっただろうと推察するだけである。

ただ、ヒトが火を使い始めた時点から、

- ・暖かい（暖房）、
- ・暗闇が明るくなる（照明）、
- ・食料を加工する（調理）、
- ・危険な動物が近づかない（安全）

などにおいて火の恩恵を感じ、また火の怖さも知るようになる。それが長い間に、ヒトのD.N.A.の中に刻み込まれたことは確かだろう。だから、今でも人は、火に対して「怖い」と感じる半面で、「なにかホッとする、安心できる」という感覚に包まれる。本能というかD.N.A.の成せる業ではなかろうか。

現代人は火おこし体験を通して、言葉ではうまく表現できない、人間の原点に近いものを、体感することができるのではないか、そう思えてならない。

（並木）



ちっちゃな火でも、あったかいねえ。

本遺跡は北区中里三丁目、田端六丁目、上中里一丁目、西ヶ原一丁目にまたがる、21万㎡にも及ぶ大規模な遺跡（北区No.40遺跡）です。武蔵野台地の東端、上野台の標高20～24mの台地上に位置し、縄文・弥生・古墳時代・奈良時代・平安時代・室町時代・江戸時代にかけての複合遺跡です。台地の北東下は比高差約15mの崖となり、中里遺跡と国指定史跡、中里貝塚が位置します。また、北西には古代の役所である武蔵国豊島郡郡衙跡に隣接することから、遺跡の中心は古墳時代の後半頃から奈良時代・平安時代にかけてとなります。なお、遺跡名の峽上の「峽」は崖の意味です。

中里峽上遺跡は既に30回を超える調査が行われ、古代豊島郡の郡寺が存在した可能性も指摘されています。また、近年の調査では平安時代の竪穴住居跡より門金具が見ついたまま炭になった扉が発見され話題になりました。

今回の調査地点は日本貨物鉄道株式会社のアパート跡地の再開発に伴う発掘調査です。

発掘調査は11月17日より開始し、予想どおり、重なり合った竪穴住居跡や掘立柱建物跡が、続々と検出されています。その中には当初の予定にはなかった、中世の遺構・遺物も含まれていることがわかり、濃密な遺跡の様相を示しています。

写真1は奈良時代の6号竪穴住居跡です。長軸3m、短軸2.8mの小形の住居跡です。白く見えるのは、壁に備え付けのカマドです。カマドのかけ口は



写真1 奈良時代の6号住居跡

壊されていましたが、内部には煮炊きの土器を支える土製の台が残されていました。カマドの脇から出土した土師器甕（赤焼きの煮炊き用の鍋）は形と器面の特徴が、現在の沼津市あたりを中心とした静岡県東部地域の土器とよく似ています。駿河国東部と武蔵国東部（直線で約100km以上）とで人の行き来があったと考えられます。

写真2は10号住居跡です。長軸6.5m、短軸5.0mの中形の住居跡です。4本の柱穴と炉、貯蔵穴と梯子穴を持つ典型的な弥生時代後期の住居形態です。柱穴の中より、写真3の手捏土器が出土しました。土器の底には珍しい線刻が認められています。細い線で縦横の格子状の表現や、斜めの線も見られます。弥生人は何を描いたのででしょうか。現在類例がないか探しているところです。

この他、一辺9mもある古墳時代後期の住居跡も調査中です。通常の住居跡の4倍もの大きさです。ムラの有力者の住まいでしょうか。次回をお楽しみに。

(及川)



写真2 弥生時代後期の10号住居跡



写真3 手捏土器（底に線刻あり）

文京区大塚町・大塚・大塚北遺跡

所在地：文京区大塚

調査期間：2009年6月～2010年3月

調査面積：1,700㎡

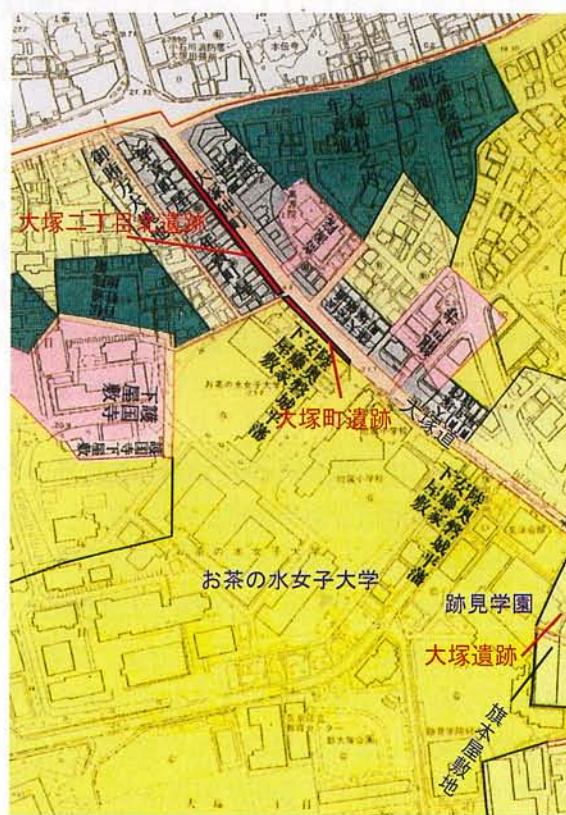
大塚町・大塚・大塚二丁目北遺跡は、武蔵野台地の東端にあたる標高20～30mの小日向台地に立地しています。南側には神田川（旧江戸川）が流れ、音羽谷、小石川谷、茗荷谷を見下ろす高台に位置し、江戸時代は富士山の眺望にすぐれた場所であったようです。調査は、一般国道254号（春日通り）の拡幅事業に伴う事前調査として、実施されました。

『江戸復原図』を見ると、大塚町遺跡は磐城平藩安藤家の下屋敷地（現お茶の水女子大学・跡見学園）に、大塚遺跡は旗本屋敷地に、大塚三丁目北遺跡は年貢町屋にそれぞれ相当します。ここでは、大塚町遺跡の屋敷境溝について、紹介いたします。

大塚町遺跡に所在した安藤家下屋敷は、「寛永江戸全図」に「安藤右京進下屋敷」と2代重長の名があることから、拝領した時期は絵図作成の寛永19～20年（1642～43）以前に遡ります。安藤家は初代・4代・6代・10代当主が老中職を務めており、家格の高い譜代大名です。大名屋敷には大名の公的活動拠点の「上屋敷」と、私的空間（別荘）の「下屋敷」に大きく分けられ、そのほか「中屋敷」を持つ大名もいます。安藤家の場合、上屋敷は頻りに場所を移しましたが、下屋敷は一貫して大塚の地に所在しています。

明治になると、安藤家下屋敷地は早い時期に陸軍用地になり、明治13年の陸軍病馬厩以後、明治23年に大塚陸軍弾薬庫、明治41年に東京陸軍兵器支廠、昭和初期は陸軍憲兵隊大塚分遣隊へ土地変遷し、現お茶の水女子大学・跡見学園にいたっています。

今回の発掘では、お茶の水女子大学の塀の真下から、大塚分遣隊のコンクリート塀・大塚陸軍弾薬庫の土塁塀、安藤家下屋敷の地境溝が重なるように検出され、先の土地変遷を裏付けることができました。江戸時代の大塚道は明治43～45年に拡張されています。この事実は、大塚道の拡張が道路の反対側で行われたことを意味し、江戸時代の大塚道は現春日通りの南側2車線に、道路の反対側の地境はセンターライン付近に想定されます。『江戸復原図』では大塚道と現春日通りを一致させていますが、発掘からより具体的な姿が浮かび上がってきます。（松井）



『江戸復原図』（東京都教育委員会作成）

『寛永江戸全図』寛永19～20年（1642～1643）
（臼杵市教育委員会蔵）

安藤家下屋敷の屋敷境溝

石器の「ツボ」 Vol. 6

石斧（その2）

旧石器時代と縄文時代の石器の観察のツボを紹介する連載の第6回。毎回、石器をひとつずつ紹介していきます。今回は前回にひきつづき石斧です。

石斧とは、石のかけらを打ち欠いて作り、細長く扁平な形に仕上げたものです。横から見ると、先端が少し尖っていることも特徴の一つです。また、重さを利用して使うので、少し重量があります。木を伐る斧、土を掘るためのスコップとして使われたと考えられています。

さて今回は、旧石器時代の石斧の役割について、紹介します。最近の学界で話題になっている「環境適応」の学説に沿って進めます。

写真は埋蔵文化財センターが調査した府中市武蔵国分寺跡関連遺跡で出土した石斧です。このような石斧は、約3万5千年から3万年前に最も多く、それ以降は減少します。再び石斧が増えだすのは、縄文時代に入った約1万5千年前以降のことです。

どうして、そのような増減が生じたのでしょうか。約3万5千年前から1万5千年前の旧石器時代は、最終氷期、一般には氷河期と呼ばれる、大変寒い時代です。最も寒い時期で、年の平均気温が現在より、約8℃低かったと言われています。

約8℃低かった当時は、台地の上には針葉樹や落葉広葉樹の林が形成されていましたが、高木はまばらで低木や草が多かったもようです。そうした植生下では食用可能な植物も少なく、旧石器人は食料

を得るために植物採集よりも動物の狩猟に力を入れていたと考えられます。

しかし、旧石器時代の約2万年間ずっと寒かったわけではなく、多少の寒暖の差がありました。約8℃低かった最も寒い時期は約2万5千年前から2万年前で、約3万5千年から3万年前は現在ほどではないにしてもそれより暖かかったのです。

約3万5千年から3万年前には、落葉広葉樹の林が形成されていました。林を切り開いて居住地を確保するために、石斧が必要だったわけです。

その後、寒くなるにつれ、石斧は少なくなりました。反対に、石器としてはナイフ形石器が発明され、しだいに増えていきました。ナイフ形石器とは、第3・4回で紹介したとおり、動物を仕留めるための槍先です。寒くなり、食用可能な植物が減るに従い、動物食への依存が高まる。狩猟が多くなると、槍が多く作られ、使われる、という関係にあります。

このように、石斧の増減、石器の変遷は、自然環境、気温の変動、そして旧石器人の生活と密接にかかわっていることがわかります。このことを、人類の「環境適応」と言います。

次号は、縄文時代の石斧を紹介します。（つづく）

石斧の「ツボ」：旧石器時代の石斧は、林の木を伐るために使われました。それは、約3万5千年から3万年前の自然環境に適応した生活と関係しています。（伊藤）



旧石器時代の石斧（写真は実物の1/3）

	主な石器	石器の用途	気温	植生
35,000年前	石斧	木の伐採	温暖	高木
30,000年前				
	↓	↓	↓	↓
25,000年前	ナイフ形石器	狩猟用の槍先	寒冷	低木
20,000年前				

石器の変遷と環境適応

くろがね物語 十九（最終話）

くろがね 鉄の考古学者

長い間おつき合いいただきました「くろがね物語」も、今回でいよいよ最終回となりました。そこで、これまで取り上げる機会がなかった鉄に関する考古学者について書くことにします。

ここに紹介する考古学者は、^{ごとうしゅいち かんばやしあつお}後藤守一と神林淳雄という人物です。この二人の研究者を取り上げた理由は、私が鉄、とくに古墳時代の刀剣や鉄鏃などの武器についての勉強を始めた頃に、強く影響を受けたからです。それはもちろん、両氏の論文や著作からです。古代の鉄器を見る場合、その基礎的な見方や研究法を学ぶ上では両氏の研究を避けて通ることはできません。

後藤守一は、明治22年に静岡県に生まれ、大正6年から東京帝室博物館（東京国立博物館の前身）の鑑査官として、太平洋戦争開戦時の昭和16年まで勤務、学会の権威者として活躍します。戦後は明治大学において教鞭を執り、研究室を創設し調査活動と後進の育成に当たりました。

後藤の代表的な著作に、『原史時代の武器と武装』があります。昭和初年に『考古学講座』の1冊として編集され、当時としては、国内出土の武器類を網羅した唯一の本だったのです。遺物の集成研究は、帝室博物館という全国からめぼしい遺物が一堂に集められていた場所に所属したことで実現できたことです。その後、『日本古代文化研究』という大著を刊行します。多様な古墳やその出土遺物から古代文化の解明を試みたもので、後藤にとっては戦前における研究の総決算ともいえるものでした。

いっぽう、神林淳雄は明治44年に山形県羽黒町に生まれ、昭和9年、國學院大学卒業後に東京帝室

博物館の鑑査官補として採用され、後藤の下で働くこととなります。大学在籍中は、人類学者の鳥居龍蔵に師事し上代文化研究会の主要メンバーとして活躍しました。神林は昭和13年～18年にかけて、『考古学雑誌』等に主に古墳時代の刀剣に関する論文を意欲的に発表しています。その内容は、刀剣類の型式や外装に関わる分類研究を中心としますが、^{てつち}鉄地に金・銀の象嵌文様を施した鉄器などにも独自の観点から検討を行いました。後藤が、体系的な武器研究の完成を目指したのに対し、むしろ神林は個々の遺物の構造や特性から鉄製武器の型式学的研究に挑みました。



神林淳雄と遺著となった『土の文化』（1959年刊行）

この間、二人の関係を詳細に知るすべはありませんが、おそらく、後藤の活発な研究活動に触発された神林が、後藤の背中を追いかける形で武器研究を手がけたと想像されます。後藤も論文「古墳時代前期の剣」の中で、神林の論考を引用している点で、後進の学者として彼を認めていたと思われる。この時、後藤53才、神林31才でした。

昭和19年、戦局が悪化するなか神林は応召され、戦地に赴くこととなりますが、二度と本土の土を踏むことはありませんでした。神林が出征する直前まで郷里で執筆し、出版元に送った『土の文化』と題する原稿が、終戦時に奇跡的に発見され、戦後15年の歳月を経て出版されました。そこには、遺物個々について丁寧な解説を加え、考古学的解釈に努めた真摯な研究者としての姿勢が窺えます。

二人の鉄の考古学者が遺した仕事は、今日でも古墳時代武器の基礎的研究として有用であり、モノに対する眼差しには学ぶべき点が多々あります。

（松崎）



後藤守一の代表的な著作本。いずれも戦前に出版されたもので、古墳時代研究の基礎的な文献です。

シリーズ 多摩の縄文 アらかると

— 森からのメッセージ —



「縄文人は何を食べていたの?」「どんな家に住んでいたの?」「何を着ていたの?」この答えは、全て森の中にある。

縄文生活の基本となる衣食住の多くは、繰り返し訪れる四季の変化と豊かな森の中で育まれた植物を素材としている。ただ残念なことに、酸性土壌の多い日本では、木や草といった有機質のものはほとんど溶けてしまい、これまでの発掘調査ではその証拠をほとんど残してくれなかった。事実、多摩ニュータウン内の遺跡では、縄文時代の木製品の出土例は皆無である。しかし、近年有機質の物が残りやすい低湿地遺跡の調査が全国で進められるようになって、植物性遺物そのものが徐々にではあるが顔を出してくれるようになった。この成果をもとに植物から見た衣食住について簡単に触れておこう。

アパレル (衣) 衣服の素材は、化学繊維が普及する以前は木綿が中心であったが、木綿自体の普及は意外と新しく、中世頃に大陸から移入され江戸時代になってようやく一般に普及し始めたもので、さらにそれ以前は、大麻、カラムシ、コウゾ、といった植物繊維が基本で、その祖形は一万年前の縄文時代初めの頃にまで遡ることができる。

福井県鳥浜貝塚では、縄の素材として大麻、アカソといった植物素材が、秋田県の中山遺跡の布はカラムシの繊維で、北海道の忍路土場遺跡ではオヒョウという木の皮から採った繊維を使って、編布という技法で布が編まれている。

フード (食) 縄文人の主食はドングリである。東村山市の^{しもやけべ}下宅部遺跡 (中期～晩期) の河道跡からは、多量のアク抜きされたトチノミや割られたクルミの殻が何箇所にも集積されて見ついている。いずれも縄文人が食べた殻である。ザルの中からは、700粒以上のアカガシの実も見ついている。秋に

採って保存していたものかもしれない。土器の底からは、ノビル状の球根がピッタリとこびりついてた。茹ですぎてこびりついてしまったようだ。小さなものでは、ヒョウタン、エゴマ、ニワトコ、麻などの種も見つかっている。縄文人はこれらをどうやって利用していたのだろう。

全国30ヶ所以上の遺跡からは、クッキー状・パン状炭化物と呼ばれているものが出土している。これまでその成分については不明とされていたが、近年の分析でドングリ系植物が主成分になっていることが明らかになった。やっぱり主食は縄文クッキーだったようで、縄文人はドングリ系男子?

石川県^{さくらまち}桜町遺跡からは、春の山菜コゴミがそのままの形で見ついている (写真)。6000年も前のもの。ほとんど奇跡的ともいえる出来事。縄文フードの食料自給率は100%である。

ハウジング (住) 住居に関する情報は少ない。地面を掘りくぼめた竪穴住居の柱には、クリの木が使われていることが、焼失住居跡の調査によって明らかになった。クリは腐りにくく丈夫なことから、最近までレールの枕木や家の土台に使われていた。縄文時代からの知恵が受け継がれている。屋根はススキ、アシ、チガヤ、カリヤスなどを^{かやぶき}葺いた茅葺であったろうといわれているが、実は屋根の部分はほとんど残っていないのでこの点は不明。

狩猟具、採取具、調理具、道具類なども全て植物素材で作られている。しかも全て純国産天然素材を使用。残念ながら今回紹介するスペースがなくなってしまったので次回に。

日本の急激な近代化の流れは、木や草をコンクリートやプラスチックに置き換えることで良としてきたが、今、コンクリートは永久ではなく、プラスチックは万能でないことに100年の時間を要して気がついてきた。今の生活が、地域、風土に根ざした自然を有効に活用してきた縄文人たちが、永い年月をかけて育ててくれたものであることを、改めて学ぶ必要があるように思えてならない。(小葉)



桜町遺跡出土のコゴミ

「たまのよこやま」の由来 万葉集巻二十 之 四四一七 の 防人となった夫の旅立ちに備えて、山野で馬に草を食べさせていたところ、馬は逃げてしまった。やむなく徒歩で多摩丘陵を越えることになってしまった夫を見送る妻の嘆きを詠った「赤駒を 山野に放し 捕りかにて 多摩の横山 徒歩ゆか遣らむ」(宇治部黒女) を由来としています。



たまのよこやま 80

2010年3月31日発行

東京都埋蔵文化財センター 〒206-0033 多摩市落合 1-14-2 TEL 042-373-5296 <http://www.tef.or.jp/maibun/>